

子ども理解と内的時間意識

榎沢 良彦

(一) 他者を理解すること

私たちが日常生活を営んでいる社会的な世界は、「客観的意味」と「主観的意味」¹の織物を成している。そのため私たちの理解には様々なレヴェルが存在することになる。相手の真意を正しく理解することもあれば、誤解することもある。私たちは純粹に客観的意味の理解のレヴェルに留まっていることもできるし、それはそれなりに



社会生活を可能にしている。しかし、他者をよりよく、より深く理解しようとするなら、私たちは主観的意味の次元にまで降りて行かなければならない。

行為の主観的意味を捉えるということは、言い換えれば、「他者の固有な世界を理解する」ということである。このような考えを受け入れるためには、「私たちは皆同一の世界に生き、同じ物を見、同じような考え方をしている」という素朴な信念を捨てなければならぬ——この信念が決して誤りというのではないが。私たちはそれぞれ異なった世界を生きている。このことは日常生活をちょっと反省すれば明らかである。例えば、長く煩っている人にとっては見るものすべて色あせて見えるだろうし、何をしても楽しくなく、興味を引かれるものも少ないだろう。逆に心が浮きたつ時には、周りのものすべてが興味深く見えるだろう。このように、気分状態によって一人の人間にとってさえ、世界の相貌は異なって見えるのである。精神病理学者のヴァン・デン・ベルクは「われわれは諸事物をそれぞれの文脈のなかで、われわ

れ一人ひとりとの関係のなかで見るのである。(中略)われわれは、事物がわれわれ一人ひとりに対してもっている意味を見るのだ」と述べている。つまり、世界は主体との関係の中に姿を現わして来るのであり、従って各人それぞれ生きる世界は異なっているのである。

このような各人固有の世界の相貌は期待、予期、後悔等によって彩られている。期待や後悔が主体に世界を輝いて見えさせたり、ものうく暗く感じさせたりする。この期待、予期、後悔はミンコフスキーが「生きられる時間」と呼んだものであり、また、フッサールの観点からすれば「内的時間意識」の領域に属するものである。時間とは人間にとって本質的な契機であり、存在論的基盤であるが、そのような立場からランゲフェルドは人間存在を「異時間重存性」と定義づけている。人間は未来と現在と過去の統一された時間を生きること、固有の有意味な世界を構成しているのである。そのように人間が生きていく時間にも内的時間意識に関わっている。人間が自分の行為を企図したり、体験に意味づけし、固有の世界

を構成するのは内的時間意識においてなのである。

してみると、他者の行為の主観的意味を理解すること、他者の固有な世界を理解することは、私たちが他者の内的時間意識に目を向けることにかかっている、と言えるだろう。このような理解の仕方は私たちが日常行なっているものなのであるが、必ずしもそれは容易というわけではない。なぜなら、私たちの社会的世界は「客観的時間」と「主観的で内的な時間」の交叉するところに成り立っているため、私たちは両者の間を揺れ動いてしま⁽⁶⁾うからである。

以上、他者を理解するためには内的時間意識に目を向ける必要のあることを述べてきたのだが、次にそれとの関連から具体的事柄を取り挙げて、日常的な理解のあり方の一面を提示しよう。

(二) 未来は変化する

日常、私たちが他者と対面状況にあつて直接的コミュニ

ケーションをしている場合、相手の内的時間意識に目を向け、主観的意味を把握することは比較的容易であるが、それでも一方的な思い込みにより誤解してしまうこともある。例えば次のような出来事もそういう場合の一つだろう。

M夫は登校早々「公園、公園」とI先生にしきりに言っていた。公園に行きたいのだ。やがてM夫はI先生と地下室に行ってしまった。その間に、担任のK先生は他児を連れて公園に出かけて行った。M夫がホールに戻ってきたとき、私は「Mちゃん、K先生公園に行つたよ」と教えてあげたが、M夫はもう公園に行くとはしなかった。(一九八七年六月六日)

この出来事についての理解は、最初に述べたように、客観的意味理解から主観的意味理解に互つて様々なレベルで可能である。この時私は、この場に居合せていたので、M夫に関して主観的意味理解に近い理解をしてい

た。

M夫は登校早々公園に行きたい様子だった。実は、前日M夫は公園に行きたい、とK先生に要求し、それを止められ、その替わり、明日必ず公園に連れて行く、と約束されていたのだ。従って、M夫はこの日、公園に行くことを期待して登校して来たに違いない。登校早々の「公園、公園」という言葉はそれを背景によりよく理解できる。ところがK先生がその場に居なかったため、M夫は期待の実現を待っていなければならなかった。恐らくM夫は「早く公園に連れて行ってくれないかな」と思いながら過ごしていたのだろう。しばらくは校内を歩き回っていたのだが、待ちくたびれてしまったのか、M夫はI先生を伴って地下室に行く気になった。地下室はM夫がよく行く場所の一つで、彼にとっては非常に興味深い場所である。恐らく、M夫は地下室でいろいろな事をして、満足して戻って来たのだろう。そのM夫に対して、私は彼が前日から公園に行きたがっていたことを知っていたので、「K先生公園に行ったよ」と誘い水を向

けてみたのである。ところがM夫の反応は私の予想に反し、彼は全然出かけようとはしなかった。「あんなに行きたがっていたのに」という思いが心に浮かび、私は拍子抜けした思いだった。

これが、私がある場に居合わせていた時の理解のあらましなのだが、ここで注意を向けたのは、「地下室から戻ったM夫が私の予想に反して公園に行こうとしなかった」点である。ここには、M夫の生の連関と私が捉えているM夫の生の連関との間にずれが存在していることが窺われる。

私は「M夫が公園に行くことを期待している」ということを知っていた。そして「地下室から戻った後も、M夫は同じ期待を持っている」と思っていた。つまり私は、M夫の期待が地下室に行く前と後とで変わっていない、と思っていたのである。ところが、M夫自身はどうだろうか。確かにM夫は地下室に行く前は公園に行きたいと思っていた。しかし、地下室から戻った時には、もはや公園に行きたいという願望は薄らいでしまっていた

のである。

このような、M夫の気持ちとそれについての私の把握と
のずれが生じてしまった理由は、私が地下室でのM夫の
経験に立ち会っていなかったことにある。地下室で様々
なことをする間にM夫の経験構造は変化し、必然的に生
の連関も変化したのである。そして「公園に行くこと」
のM夫にとっての意味が、地下室に行く△前▽と△後▽
とで変化してしまったのである。登校時にM夫が見てい
た未来（の出来事）の意味と、時間が経ちある経験をし
た後にM夫の前に現われた未来（の出来事）の意味とは
異なっていたのである。一言で言うなら、ある経験がM
夫を変えたのであり、そのことを私が視野に入れていな
かったことが理解の浅さを生んだのである。少なくとも
も、地下室でのM夫の行動に私がつき合っていたなら、
その後の彼の気持ちの変化を完全に理解することはできな
いにしても、そのことを視野に入れつつ彼に対応する可
能性は広がっていただろう。

このように、子ども自身にとっての未来の意味は決し

て固定したものではなく、時間の経過とともに絶えず変
容しうるものなのであるが、保●育●者●が●捉●え●る●子●ども●に●と
っての未来の意味は一時点で固定されてしまう可能性が
ある。これは、人間が皆独自の存在であるという厳然た
る事実により必然的に生じる問題なのである。保育者
は、たとえ子どもと一緒に行動したとしても、決して完
全に子どもの経験を理解することはできない。その近似
値を理解することができるだけなのである。ましてや、
行動を共にしない場合には、保育者の理解は不十分にな
らざるを得ないし、接触を失った時点の理解に固着して
しまいやすいのである。

この出来事の例のように、日常生活において、期待さ
れている出来事や事物の意味が時の経過につれて変容し
てしまうということはよく起こる。例えば、さんさんだ
だをこねて欲しかったものが手に入ったのに、いざ使え
る段になったら、子どもが今一つそれに気持ちを打ち込め
ないということがあろう。それは「だだをこねる」
という経験が子どもの経験構造を変えてしまい、意識が

変客し、そのものに対する興味が薄らいでしまったからなのである。

保育者が子どもの内的時間意識に立って子どもを理解するということは、考えてみれば当然のことなのであるが、必ずしもそのようにできてはいない。時として、子どもを無時間的存在⁽⁸⁾として捉えてしまうこともある。そこで、私たちがうっかりそういう見方に陥っていると思われる場合を、多少図式的になるが、検討してみよう。

(三) 空間的理解と時間的理解

一般に子どもが一つの活動（お絵かき）に熱中した後、別の活動（トランポリン）に移ったりすると、「お絵かきにあきた」と言うことができる。このような場合、「あきる」という言葉によって子どもの姿を必ずしも否定的に評価しているわけではないだろう。だが、日常的な言語使用において、この言葉には否定的意味合いが込められる場合がある。例えば「うちの子はあきっぱ

い」と言い方はそうであろう。ここで問題になっているのは「興味が変わること」自体ではなく、「早く興味が変わること」にあるように思える。しかし本当に大事なのは、「活動時間の長短」ではなく、「活動の内容」が、「子どもがどのように活動したか」という点であろう。時間の長短は活動の形態を見るだけで十分であるが、「如何に」の方は子どもの内的時間意識に目を向けることによって初めて把握されることなのである。どうやら私たちは、子どもの内的時間意識に即さずに、行動の外的形式から子どもを理解したとき、安易に否定的ニユアンスを込めて「あきる」という言葉を使ってしまうようである。そのように理解している時、私たちは子どもとどのような関係に在るだろうか。

この場合、子どもの活動は空間的に配置され、物理的時間に属する「もの」のように見られている。諸物自体は相互に何の関連も持っていない、それ自体として充足し、そこにあるだけである。そのように存在する活動の間を子どもが気ままに飛び移っていると捉えられている

のである。このような捉え方は△空間的捉え方▽であり、△時間の次元▽が欠落している。つまり△経験▽という時間的契機が見落とされているのである。

活動の過程で主体は経験をし、意識は変容していく。

主体の経験構造、生の連関は活動の過程で変化していくのである。従って、同一の事柄→例えば一冊の本でもよいし、公園に行くことでもよい→の持つ意味は活動の過程で変化していくのである。△一つの活動をした▽ということとは△経験を積んだ▽ということなのであり、それにより子どもは次の活動へと動機づけられて行き、同一の事柄をもさっきとは異なった意味を持っているものとして捉えるのである。子どもは決して空間的に存在する諸活動の中から無作意に一つを選択しているのではない。仮りに子どもがE₀という経験構造を有しているとする、彼はその地平に立ってAという活動をする。Aをしたことにより、E₀はE₁へと変容し、そのE₁の地平に立って子どもは新たな活動Bをするのである。このように活動と経験構造とは密接に関連し合っているのである。

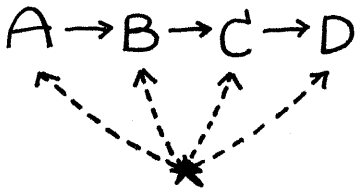
そのために、さっきまでは関心外であった事が、今は関心の対象となりうるし、その逆もまた起こりうるのである。以上の説明を図式化してみると次のようになるだろう。

子どもはA、B、C、D…と活動を展開していく。彼は活動Dに臨む際にはAからCまでの経験、つまり歴史を通してDを見ているのである。ところが図Iのように、保育者が子どもから隔たって単に彼の活動を見ているだけの場合、保育者は子どもの歴史に立ち会っていないため、活動を単なる出来事の継起として、相互に孤立したものとしか見ることができない。個々の活動を子どもの生の連関の中に十分位置づけることができないのである。

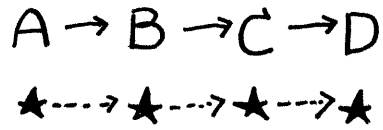
一方、図IIの場合、保育者は子どもと共に活動を経験している。保育者は子どもの歴史に立ち会っており、内的時間意識から個々の活動を相互に関連し合った意味あるものとして見ることができるのである。

図IIのように保育者が子どもと共に活動することがで

子どもの活動



保育者(図I)



(図II)

きているなら、子どもの活動の変化を意味ある変化として積極的に捉え、保育者自身も楽しむことができるだろう。

ここまで、子どもを理解することによって内的時間意識に注目する必要性を述べてきた。「この子は何をしたいのかしら」と思う時、私たちは既に子どもの内的時間の中に立ちようとしているのであり、そのことは決して特別な訓練や技術を必

要とするものではない。だが一面、いつの間にか保育者が子どもの生の連関から離れてしまうことも事実である。その意味で子どもを理解することは絶えざる努力を要することでもあるのだ。

[注]

- (1) ここで言う「主観的意味」とは、行為者自身が自分の行為に付与する意味であり、「客観的意味」とは、行為者自身の意識から切り離され、一般的に与えられている意味のことである。この問題に関する現象学的分析は、A・シュッツ『社会的世界の意味構成』一九八二年 木鐸社 一八五〜一八九頁に詳しい。
- (2) ヴァン・デン・ベルク『人間ひとりひとり』一九七六年 現代社 四六〜四七頁
- (3) ミンコフスキー『生きられる時間 1、2』一九七二年 一九七三年 みすず書房
- (4) フッサール『内的時間意識の現象学』一九六七

年 みすず書房

因に、内的時間と対立するものは「客観的時間」とか「物理的時間」と呼ばれるもので、等質的で計測可能な時間である。

(5) ランゲフェルド『教育と人間の省察』一九七四年 玉川大学出版部 一〇頁

(6) シュッツは、行為は「内的時間」と「外的時間」において生じる出来事として体験され、「生ける現在」はその両者の統合したものである、と述べている。M・ナタンソン編『アルフレッド・シュッツ著作集2』一九八五年 マルジュ社 一九〜二〇頁

(7) 生の連関とは、内的時間意識において主体により関連づけられている経験や未来への企図のまとめりである。

(8) 無時間的存在とは、自然科学が対象とする「自然」のような存在である。

(9) シュッツは二つの活動プランのうちから一つを選択することを、意識の流れから説明している。A、B二つのプランを交互に思い描く過程で主体は経験を

し、意識が変容する。そのため、二つのプランも、 $A \downarrow A_1 \downarrow A_2 \downarrow \dots$ 、 $B \downarrow B_1 \downarrow B_2 \downarrow \dots$ と変容して行き、最終的に一つの活動が選ばれるのである。M・ナタンソン編『アルフレッド・シュッツ著作集I』一九八三年 マルジュ社 一五六〜一五八頁

(東京大学)